

**2014 年度 教師海外研修 研修報告書****派遣国：タンザニア**

学校名：神奈川県立氷取沢高等学校

担当：地理歴史・公民、3 学年

氏名：古屋 唯生

**1. 今回の研修における目的やねらい**

アフリカ、タンザニアの開発・支援の現状を水、電気、交通網、生活様式、歴史、教育分野等、多角的な視点から考察すること。自らが現地で感じたこと、触れたもの、交流させていただいた方々、移動中に見た景色を含めた全てを、時間をかけて多くの切り口から教育現場に還元すること。

この度の最大の目的は「開発とは何か」を真に考えることであり、私が青年海外協力隊を引き続き継続して教師を続けながら希望すべきか、もしそうであれば、この度の研修をどのように社会科教師として重要な単元でもある「国際社会」に教育現場を通して還元するかである。私は途上国理解を念頭に置いた国際理解教育の進展につなげる教師として展開できるのか現地にて多くを体感し、確認する必要がある。私は、この教師海外研修で、自己の途上国支援の基礎的価値観の構築につなげていきたい。

**2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか**

最貧国と呼ばれるタンザニアの支援の課題を直接体感した。現地にて支援のために奮闘する様々な立場の方々の姿勢、あり様を視察させていただきながら、途上国支援の共通項に「人を育て、自立を促す体制の構築」という共通項をまざまざと確認し実感できた。私の教育に対する姿勢に大きく影響し、途上国支援を JICA を通して自身も関わりたい、人材を育てることで各個人の支援は大河の一滴にとどまらず無限の発展の可能性になることを見出した。また、この度、キラカラ中学校での交流授業や勤務校の生徒が手作り廃油ハーブ石鹸の実践を地元の先生（イスラム施設マドラサにて）に協力してもらいながら現地の人々に紹介するという企画をホームステイ家族の方々と交流して達成できたことは大きな成果である。

**3. タンザニアから学んだこと**

開発とは何か、発展とは何かを深く考えさせられた。また、各部族の融和の歴史と政策からみた現在のタンザニアの課題と現状を学んだ。現在のアフリカは支援慣れして自立した経済発展が進展していないという。その現状がどのようなものであり、その諸課題の克服と展望にかける岡田眞樹在タンザニア大使をはじめ、JICA、各公社、個人をはじめとした現地日本人の方々から、その葛藤と奮闘を垣間みられたことは大きな修養であったと思う。

**4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか**

教師として、自学習活動の中心である授業やその他の全ての教育現場で臨場感を持って活かしていきたい。とくに、タンザニアに限って強調するのではなく、東アフリカの一例としてのタンザニアにしていくための教材研究が欠かせないであろう。タンザニアは、単にブラックアフリカというだけではなくアラブ世界、インド洋文化圏等多様な要素を含み、経済成長を続ける国際社会の中のアフリカ位置づけとしてふさわしい内容ではないだろうか。今後も自己修養を積みたい。

**5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案**

よかったこととしては、現地にて、多くの分野の関係者の方々に直接伺えたこと、ホームステイができたことは大変嬉しい。よりよくするための提案としては、今回は全体の雰囲気からすると、余裕がなさすぎたことではなかろうか、一日の中で自己に向き合う時間や夜の一時の休息は、各個人がその日をまとめる上でも大切であろう。やはり、日によってではあるが、移動の連続、夜 23 時をまわる振り返り等の反省会は翌日に響く。一日一日の終了の区切り目を付けると良いのかもしれない。

## 6. 海外研修での役割（各担当や日直）を振り返っての感想・提案など

団長として、団全体の調整ができたかについては課題が残る。しかし、表敬訪問等、緊張感のあるやりがいのある役割であった。計画していただいた JICA の全ての方々に感謝し、派遣団の諸先生方に感謝したい。いつでも、「明るく、楽しく、元気よく」を努め、今後も雰囲気づくりをしていきたい。

## 7. その他、研修全般を通じての感想・意見など

この度の研修の全員が大きなトラブルもなく、安全・安心して帰路につけたことは、企画・立案・調整していただいた JICA 職員の方々をはじめ、各公社、大使館の方々の計らいがあったからである。私は多くの方々のお膳立て上に研修させていただいた身であり、このような研修経験を勤務校はじめ教育全体に還元していかなければならない。

## 8. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

私も含めて、現地研修後の授業案計画をある程度、視野に入れておかないと、現地にてあまりに情報量が多いので、ただ、闇雲にデータ量をストックしてしまうだけに陥りがちになる。行かれる方は、ご自身の専門性・教科・カリキュラムと照らし合わせ、できる限り明確な「私はこんな授業がしたい」程度の指導計画ができていると対象が定まり、目的に応じた情報・教材を精選できるのでは。

## 9. 各訪問先等の所感

日 時	テーマ	所 感
8 月 11 日 (月) -12 日 (火)	日本からタンザニアまでの 移動中および現地到着	機内にて、この度の研修内容の中で、自身の指導にどうつなげていこうか、ザンジバルの現状に関係する著書を読みながら過ごしていた。
8 月 12 日 (火)	JICA タンザニア事務所表敬 研修ブリーフィング	JICA 足立様、大西所長、友成次長などに挨拶し、大森健康管理員から安全対策について説明を受け再度認識を深めた。
8 月 12 日 (火)	本日の振り返り (日直)	研修ブリーフィング時に聞いたタンザニアの開発に対するスタンスや概要と展望の内容をまとめ、この度の研修プログラムのどこに自分が焦点を当ててるか考えた。
8 月 13 日 (水)	JICA タンザニア事務所 研修ブリーフィング	タンザニアの概要を JICA 事務所で伺う中でこの度の研修の要である、電力、水、教育に関わる概要と説明を受けながら、現状について考えた。
8 月 13 日 (水)	ザンジバルへ移動	ジェット船ではあったが外に出て、ダウ船の航行を見学し、伝統的な帆船の活躍に驚いた。また、ザンジバルの人々との交流をするなかで本土との経済格差を感じた。
8 月 13 日 (木)	隊員との懇談会	沢谷隊員をはじめザンジバルで活躍する協力隊の

		方々と交流し、ザンジバルの生活・挑戦を聞き、私も協力隊として活躍し、日本の教育に還元できたらと感じた。
8月13日(水)	本日の振り返り	明日の国立病院見学、隊員の活動見学についての確認。
8月14日(木)	ムナジモジャ病院 沢谷隊員 活動視察	主に外科病棟視察と理学療法で活躍する隊員の現状の視察の中で患者との交流も交えながら、医療の現状と課題を考えさせられた。支援慣れからの脱却という途上国の現状はザンジバルも例外ではないと感じた。
8月14日(木)	専門家との懇談会	病院の規模や設備の話、医師の不足、ボランティアの重要性等について聞き、識見を広げた。
8月14日(木)	ザンジバル水公社 (ZAWA) プロジェクトサイト視察	訪問挨拶、湧水～配水池までを見学し、水の供給状況の途方もない課題と現状に取り組む ZAWA の方々の姿勢に感銘を受けた。インフラの基礎である水の配給の諸課題から途上国の発展の課題の共通項が見えてくるのではないかと考えた。 また、奴隷の歴史を物語る教会、地下室等を視察し、植民地支配の歴史からアフリカの現状とアフリカ人の精神性を垣間見ることができるのかもしれない。
8月14日(木)	本日の振り返り	ZAWA 訪問のまとめと、メンバーの反省から共有すべき点をあげる。翌日の行程の確認。
8月15日(金)	ザンジバル水公社 (ZAWA) プロジェクトサイト視察	配水池～各住民までのメーター取り付け、住民へのインタビューを通し、上水道の供給状況を視察し、漏水や電力（ポンプ引き上げ）とのバランス等、安全安心な水供給の普及がいかに困難であるのかを知り、ZAWA の意志に基づく取り組みに驚嘆した。開発とは何か、それは、支援から自立させ、持続可能な発展を促すことであると確信した。
8月15日(金)	ホームステイ先との交流	あらかじめ用意した、生徒作成の手作りハーブ石鹸、スワヒリの動画・紙芝居・説明ビラ・メッセージを用意し、翌日、マドラサの授業の中で地元教師の了解のもと、ホストファミリーと出前授業を計画・立案した。この度の私の挑戦の山場でもあった。日本の高校生の思いを地元のザンジバルの人が受け取り、ザンジバルの先生が授業をすることがなされたことに喜びを感じた。 この時、研修の主体は私個人であるが、研修の目的は全てを生徒に還元することであると再認識した。
8月16日(土)	ホームステイ先との交流	手作り石鹸授業は、苛性ソーダが前日、現地調達

		できず、実験はできなかったが、地域の大人からも質問されるなど大成功に終わった。日本の生徒に「君たちの意思は受け入れられた」と伝えたい。なにより、この度の研修に受かることを信じて生徒とともに春から準備してきたことが実現したことは何よりも嬉しかった。ホストファミリーと立案してくださった JICA 足立様に感謝したい。
8月16日(土)	教材購入	ホストファミリーとの別れ、ホテルからの外出は4時をあたりで教材購入の時間はなかった。夕食前に浜辺に行き観光地ザンジバルの活気を感じた。
8月16日(土)	本日の振り返り	ホームステイの振り返りとともに ZAWA、ムナジモジャ病院の見学を総合した内容。
8月17日(日)	ダルエスサラームへ移動	ジェット船の甲板から、一人乗り小型帆船で沖まで漁をする漁師の姿や鯨との遭遇は雄大なアフリカの自然わずかながら体感できた。
8月17日(日)	モロゴロへ移動	内陸に移動中、植生を観察していた。海洋性気候と内陸性気候の植生の変化は明らかであり、サバナ気候とも言うべきかアフリカらしい景色への変化は乾季の強烈な暑さを連想させた。また大都市ダルエスサラームから地方都市モロゴロ移動の中で大都市への人口の一極集中問題を見ることができた。
8月17日(日)	隊員との懇親会	担当していたキラカラ中学校の訪問の打ち合わせを隊員の方々としながら交流をした。その中で全寮制女子学校の成り立ちや、宗教・部族の融和を掲げたニエレレ政権の政策について調べてみたい。
8月17日(日)	本日の振り返り	翌日の交流企画の段取りについて話し合った。時間の制約がある中、当日の状況を予想し時間配分が課題であった。
8月18日(月)	キラカラ中等学校 稲村隊員 活動視察	印象的には、学力の高い学校である。日本の大学生レベルまでの内容を詰め込み型で授業し試験により振り分けられる。教育体制への批評は別として、生徒は明朗で笑顔が絶えない。隊員の授業を15分だけ見学したが、普段の授業風景を感じ取れた。校内設備は比較的充実しており、保護者の教育にかける思いを強く感じる。交流企画は完全ではないが成功したと感じている。しかし、時間的制約が大きく、中学校職員から校内の日々の生活等について質問する時間がなく反省が残る。
8月18日(月)	ダルエスサラームへ移動	途中、タンザン鉄道の老朽化した軌道を見た。夕

		ンザニアの交通網の整備はダルエスサラーム港の恵まれた位置とは対照的に未整備の部分が多い。道路の舗装はわずか8%であり、幹線道路を走りながら、開発には交通網の整備が不可欠であると感じた。やはり情報通信サービスの急激な進展でなされている経済成長は危うく、第二次産業の製造業を伸ばしていかなければならないのは必須である。
8月18日(月)	本日の振り返り	これまでの振り返りと、翌日の TANESCO 視察の段取りの確認をした。電力事業と ZAWA の水事業の開発・支援の共通した事項や考えを伺うことで現在のタンザニアにおける課題と展望を見出すことが自身の目的であった。
8月19日(火)	タンザニア電力供給公社 (TANESCO) プロジェクトサイト視察	電気の普及率は 20%ほどというタンザニアにおいて、現在東アフリカ全体の融通を考える上で重要な位置を占め 80 年代から JICA との体制を構築してきた。人口ピラミッドからみても多産多死型と呼ばれる形態が続く状況下で、電力普及には技術者育成が欠かせない。同公社で学んだ者が自立して村に帰り技術者としてやっていく体制を整えなければならないと担当の長坂様は言及した。科目の修了証を公的なものにするのとともに、人材開発に尽力している状況である。ここで私が注目したのは、電力を扱う公社、水を扱う公社の共通点は ODA の協力を得て、JICA とともに歩む姿勢を取りながら対象を「モノ」ではなく「人」にしているところであろう。担当の小田切様は、人材育成は「電力を扱う場合においても対象を人として、相互の信頼の醸成」と語る。これは途上国の自立した発展の共通課題であり、開発とは何かの1つの解答ではないだろうか。
8月19日(火)	教材等購入	スーパーなどで現地にて飲まれている茶「チャイ」や、タンザニアを代表する絵画「ティンガティンガ」、女性が身につける綿布「カンガ」等を購入した。
8月19日(火)	本日の振り返り	これまでを振り返り、各研修のメンバーがこの度の研修の改良点などを意見し合った。次回の教師海外研修の参考にできたらと思う。
8月20日(水)	JICA タンザニア事務所	8月11日、12日の内容をふまえ現在のタンザニア

	報告会	<p>の発展の現状と課題を視察した感想も交えて思いを伝えた。雑感ではあるが、「この研修で何を得たか、この経験をこれからどう活用していくか」について話すことができた。</p>
8月20日(水)	在タンザニア日本大使館 表敬訪問	<p>岡田大使と直接大使公邸で面会する機会を用意していただき、直接聞きたいことが山のようにあった。大使は東アフリカ共同体を意識しており、主要都市への交通網の整備、地理的なタンザニアの位置付からアフリカでの重要性、日本の国益につなげるための支援を行う上で、タンザニア国民が感謝の上で日本とパートナーシップを取り合うことを望んでおられた。「魚をあげるのではなく、魚の獲り方を教えることが大切」という言葉の裏には人と人との結びつきと喜びを分かち合うことの重要性を物語っている。</p>
8月20日(水) -21日(木)	タンザニアから日本までの 移動中および日本到着	<p>ザンジバルの生活に関する著書を読みながら、この度の研修から、どのような授業を展開して生徒に伝えていくか考えた。アフリカは、日本にとって「遠い異国」という認識がある。しかし、国際理解教育の中で、途上国の持続可能な発展・開発の状況を伝える上で、タンザニアの経験が生徒の知的好奇心に結びつくように工夫していく必要がある。生徒の現状を勘案し指導案作りに励まなくてはならないことを実感した。</p> <p>そして、この度の海外研修を計画してくださった JICA 職員の皆様に深く感謝し、所感のまとめとしたい。</p>